

熊野の
木林から

怪熊野

「天狗(其の二)」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



毎月旧暦七日と28日の晩には天狗の神楽太鼓が聞こえるという古座川の十万岳(写真提供、山本隆寿氏)

熊野の「天狗(てんぐ)」は、那智山にだけ出たわけではない。その他の地でも天狗の伝承は数々残されている。これは古座川の猿川の話だが、ある朝、村人の長兵衛が獣のワナを見にいったところ、若い女がワナにかかって苦しんでいた。通りがかった山伏が女を助け「湯治に行って傷をなおし、この仇(あだ)は必ずとってやる」と言うか言わないかのうちに女を背負って

空へと飛び去った。長兵衛は驚きのままだに家へ帰ったが、天狗だったのかも知れないと恐れ、すぐに戻って大岩ともみじの木に、今後は、もみじの木は薪(まき)にしない事を誓い、毎年12月1日にだんごを供えることにした。その後、天狗が現れることはなかったが、毎月28日には山の中で太鼓を叩く音が鳴り響く。今でも3畳敷程ある大きな岩でできた祠(ほこら)が残っている、という話だ。同じ古座川の潤野(うるの)に十万岳という山があるが、この山に棲(す)む天狗は、毎月旧暦7日と28日の晩には雷のように神楽太鼓を打ち鳴らすという。

串本の田子にある双島には、村娘に恋をした修行中の若い天狗の話が伝わっている。権現様から大峰山に戻るように命じられ、懸命に修行を積み、大天狗になって戻って来たが、時が経ち過ぎていたため娘は既に現世から去っていた。悲しんだ大天狗は、娘を弔(とむら)う大石を各地に置いたという。その岩は、



熊野の各地で行われている獅子舞。必ずと言ってよいほど「天狗」が登場する。人口減少の中、その存続が危ぶまれている。写真は白浜町、堅田八幡神社の獅子舞で、獅子に剣を渡す天狗(写真提供、吉村旭輝氏)

今でもたくさん見ることができ、時折、天狗が休んでいるという。日置川には明治時代に天狗に仕えた人間、徳松の話があるし、熊野市の荒坂には天狗の羽根を奪った兄の代わりに天狗に殺されてしまった弟の話が残っている。他にもたくさん天狗話がある。筆者は熊野の天狗は鉾山と関係があるともみているが、今も深山で修行をしているのかも知れない。

このように熊野の各地で人々との関わりを持ってきた天狗であるが、熊野の獅子舞には天狗が登場する。神の命を受けた天狗は、荒ぶる獅子を手なずけ、獅子に剣を手渡し、獅子は剣を抜いて世の邪悪を祓う、という物語が大半だ。伊勢大神楽における「猿田彦」と同じ役割で、熊野では天狗が神格であることがわかる。ところが、今、人口減少が進む中、獅子舞の存続が危ぶまれている。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。
専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

